

日本語におけるスピーチスタイルの男女差： 音の脱落化の観点から

野 木 園 子

1. はじめに

今や世界中の様々な言語に程度の差こそあれ男女差がみられることは知られている。言語と性の問題は、社会言語学の主要な領域のひとつを占め、近年ますます関心が寄せられている。現代日本語の男ことばと女ことばの研究は、発音からディスコースにまで及んでいる。特に、男女間における、文法レベルでは、終助詞、敬語の違い、語彙・表現レベルでは人称代名詞、形容詞、感嘆詞の違い、談話レベルではあいづち、さえぎりの違いなどの研究はよく見られるところである。しかしながら、言語行動の実態を調査し、客観的分析を加えた研究は未だに多いとは言えない。その中でも音韻面における男女差の研究は数少ないのが現状である。

音韻変化の主な現象の1つとして、音の脱落化がある。発音面における音の脱落は、インフォーマルなスピーチスタイルの特徴（田中1988, p. 304）であるとされている。野木（1995）では、ハワイにおいて東京出身の男女各7人へのインタビュー調査を行い、音脱落を伴う音韻形態を調査した。その結果、初対面というフォーマルな状況下においては、男性の発話には女性の発話に比べて、頻繁に音の脱落を伴う音節転化が見られることが分かった。男性は音韻上インフォーマルな形とされる音の脱落を伴う形を多用するのである。音脱落を伴う音節転化を分類すると以下の通りであった。1. 「動詞+て」形の後の [i] の脱落（例：いつも注意して__ますね）、または、[e] の脱落（例：とっとく [tottoku]（<とっておく [totteoku]））

2. 母音の脱落による撥音化（例：わかんない [wakannai]（＜わからない [wakaranai]））3. 母音の脱落による促音化（例：あったかい [attakai]（＜あたたかい [atatakai]））4. 音節の脱落（例：ところ（＜ところ）、そーふう（＜そういうふう））5. 縮約（1）きゃ [kja]（＜ければ [kereba]）（2）ちゃう [tʃaw]（＜てしまう [teʃimaw]））音節の脱落、「そーふう」が女性の発話にのみ見られたのを除いて、すべての音節転化において、使用回数は、女性より男性の方が多かった。女性34回の使用に対して男性はその約2.4倍である83回である。つまり、音韻面では女性に比べて男性の発話に、より頻繁に音の脱落が見られたということである。

そこで、本研究では、このパイロットスタディを踏まえ、さらに規模を拡大し、インタビューの環境も整えて、男女間で音韻的形態に関して差が見られるかどうかを調査する。そして、その結果を社会言語学的に考察することを目的とする。

男女間で音の脱落を伴う形態の使用に関して差が見られるかどうかを調査するという目的に沿って、具体的には、先ず、以下に述べる仮説を検証する。

仮説：インタビュー談話というフォーマルな状況下において、音韻上、男性は女性よりも「くだけた形」とみなされる「音の脱落を伴う形」を使い、女性は男性より「より正しい」とされる「元の形」を使う傾向にある。

2. 音の脱落と男女差に関する研究

2. 1 様々な言語における音の脱落と男女差

1966年、Wolfman (1969) は、アメリカ、デトロイトにおける黒人の男性と女性の話しことばについてある違いを発見した。それは、子音連続が語末にある場合、男性はその最後の破裂音を女性よりも落とす確率がかなり高いということである。また、car, mother のような母音の後の /r/ も男性は女性に比べて発音しないことが多いという。Labov (1973) もアメリカ、ニューヨーク市における研究で、男性は母音の後の /r/ を女性よりも落とすと報告している。更に、Romaine (1978, p.

150) もエディンバラにおける小学校の生徒対象の調査で、母音の直後に来る／ r ／に関して似たような現象を観察している。それによると、男子生徒は歯茎はじき音の [r] を使用するが、女子生徒は無摩擦音で半母音の [ɹ] を使用し、それと同時に、男の子は／ r ／を落とす傾向があるのに対して、女の子は／ r ／を発音する方を好む傾向にあると言う。

これらとは反対に、ノースカロライナ州のヒルズバロでは、教育を受けた人の話す南部方言では、／ r ／を発音しない形が標準形だったが、今日では全国的に広がった、いっそう権威ある標準形、母音の後の／ r ／を特に女性が使用する傾向が見られる。地位の高い変種、あるいは全国的な標準形がある場合には、普通は女性の方がその標準形に向かって変化を起こす。(トラッドギル, 1988, p. 111) また、コロンビア、カルタヘナのスペイン語でも、男性は極めて頻繁に音節あるいは語末の／ s ／を落とす傾向があるが、女性は頻繁に／ s ／を発音し、話し言葉においてより保守的である。(Lafford, 1982)

更に、トラッドギル (p. 110) によれば、シベリアで話されているチュクチ語の何カ所かの方言では、特にあるいくつかの語において、女性の話し言葉には男性にはない母音間の／ n ／と／ t ／があると言う。例えば、男性が nitvaqaat と言うのに対して、女性は nitvaqenat と言う。モントリオールでは、代名詞や冠詞 il, elle, la, les の [l] の音を男性は女性よりかなりの確率で発音しない。(ウオードハフ, 1994)

したがって、男性の方が女性に比べて音を落とすという現象は、ある一言語にとどまらず様々な言語で見られるということが分かる。

2. 2 日本語における音韻変化と男女差

日本語音韻における男女差の研究として、パン (1981) の研究がある。この研究では、インタビュー調査により、音韻的变化を、撥音に関するもの、促音に関するもの、連続母音、撥音・促音以外の音節転化、[i] の脱落、その他に分類している。これらのすべてが音の脱落による変化ではないが、それぞれの項目で男性と女性を比べると、どれ一つとして女性が男性を上回っているものはない。ゆえに、パンは、

日本語における音韻的特徴として、男性は女性よりも変化の種類が多く、頻度も高く、話しことばにおいてことばをくずす傾向が強い。更に、女性の方が男性よりも「正しい」形を使い、保守的であると述べている。

これとは反対に、Shibamoto (1985, pp. 53, 54) (Shibamoto (1987, pp. 27, 28) も参照) は、女性の話ことばの特徴として [i] の脱落に関して次の2例をあげている。「いやだわ」→「やだわ」、「けっこーでございます (gozaimasu)」→「けっこーでござーます (gozaamasu)」。しかしながら、あげている例があまりに少なく、また、実験によるものでもない為、女性の話ことばの特徴と言うには不十分であると考えられる。極めて限られた年令の女性の話ことば（筆者個人は、実際に「ござーます」という表現をまず聞かないが）を直感的に捉えているだけのように思う。加えて、男女共に見られるものの、より女性に多い音韻変化として [r] の同化をあげている。「わからない (wakaranai)」→「わかんない (wakannai)」、「わかるの (wakaruno)」→「わかんの (wakanno)」、「そーかも しれない (soo ka mo sirenai)」→「そーかも しんない (soo ka mo sinnai)」これも実験による分析ではない為、実際の男女のスピーチが記述されているかどうかは疑問である。

野木 (1995) のパイロットスタディによると、母音の脱落による撥音化現象は、女性より男性の発話に3.5倍多く生じた。

日本語における脱落を伴う音韻変化についての男女差に関する研究は、まだ数が少なく、体系的な研究はほとんどなされていない。

3. 調査の概要

3. 1 調査対象者およびインタビュー

調査対象者は、東京及び東京近郊出身の、ある大学に在籍する18～20歳の男子大学生20名、女子大学生20名である。大学生を調査対象に選んだ理由は、筆者の職業上、調査対象者を集め易いと考えたことが大きな理由であるが、大学生に10年以上接していて、男女間におけるスピーチスタイルの違いがこれらの年令にも見られる

のではないかと予測していたこと、また、その実態を明らかにすることに興味があったのである。

インタビュアーは、大学の事務職員2名、男性30歳、女性29歳に依頼した。ともに東京近郊に10年以上住んでいる。この人たちは、調査対象者とは面識がなく、今回は初対面である。男性のインタビュアーが男子学生に、女性のインタビュアーが女子学生にインタビューを行った。

3. 2 調査期間および調査場所

調査期間は2005年6月から7月で、調査場所は大学構内である。

3. 3 調査方法

調査方法としてインタビュー調査を実施した。この方法だと現在の人々の実際の話しことばを記述できるということと、尚且つ、言語収集の条件をすべての対象者間でほぼ一定に保てるという利点がある。

インタビューの方法は、あらかじめ用意しておいた以下の14の質問に答えてもらうやり方で、会話はテープに録音し、書き起こした。質問はパン(1981, pp. 21-23)で使用されたものをモデルとし、修正を加えて作成した。質問1～5は、対象者の背景を引き出すため、6～9は、リラックスしてもらい発話を促すため、10～14は、ことばに関する意識を探るための問題である。

インタビューにおいて、インタビュアーと対象者の関係は常に初対面であるということで統一した。そうでないと、親しさの度合いによりスピーチスタイルが様々になり、男女の差を把握できなくなると考えたからである。その点、初対面ということで一定にすると、集められたデータは対象者間でくらべることができるものになり、男女間のスピーチスタイルの比較が容易になる。

質問は次の通りである。

1. お名前を教えてください。

2. お生まれはどちらでしょうか。
3. 主にどちらで育ちましたか。
4. 現在はどちらにお住まいですか。
5. お年はいくつですか。
6. 今一番興味のあることについて、お話していただけますか。
7. 大学生活で、自分が考えていたのと違うといったようなことはありますか。もし、あったとしたらどういったことですか。
8. 夏休みは何をする予定ですか。
9. 今一番行ってみたいところはどこですか。また、その理由を教えてください。
10. 次は、ことばについてお聞きします。あなたが、一番丁寧なことばで話す相手はだれですか。
11. 丁寧に話さなければならないとき、ことば遣いのどういった点に一番注意しますか。
12. ことば遣いについて、ご両親から注意を受けたことがありますか。あったとしたらどういったことですか。
13. 男性の話すことばと女性の話すことばには、違いがあると思いますか。あるとしたらどういったことですか。
14. あなたは、他の人のことば遣い、例えば、良いとか悪いとか、気になる方ですか。

4. 調査結果と分析

4. 1 音の脱落

音の脱落を伴う主な音韻変化を次のように分類した。(分類の仕方は、パン(1981, 第3章 動詞の形態, 第8章 音韻的特徴)を参考にした) 1. 母音の脱落による撥音化、2. 音節の脱落に伴う促音化、3. 「動詞+て」形の後の[i]の脱落、4. 音節の脱落、5. その他の音節転化 以下にあげた例はすべてデータからである。

男性または女性のみにはしか見られなかった例に関しては、(男) または (女) と明記した。

*発音記号は国際音声記号を使用した。

4. 1. 1 母音の脱落による撥音化

[no] > [n] ([o] が落ち、続いて [n] が撥音になる。)

ここで見られたほとんどの変化は、「～ので [no]」が「～んで [nde]」になるものだった。それ以外の変化は、男性の発話にのみ見られた「～んとき [ntoki]」(<～のとき [notoki]) と「～んところ [ntoko]」(<「～のところ [notoko]」) である。

例：

- ・キャンプがあるんで [arunde]、(<あるので [arunode])
- ・目上の人なんで [çitonande]、(<人なので [çitonanode])
- ・アルバイトん時 [arubaitontoki] (<アルバイトの時 [arubaitonotoki]) (男)
- ・今んところ [imanotoko] (<今のところ [imanotoko]) (男)

これら以外に [no] > [n] になるケースとして、「～んじゃない」、「～んでしょう」、「～んです (か)」、「～んだな (と思います)」などがあった。しかし、これらの形は、日常的な話しことばにおいては、[no] と発音するよりも自然であり、これらを含むと、他の変化が数の上で正しく読み取れない可能性があるため、ここではカウントしなかった。同様に、「なんか [nanka]」(<「なにか [nanika]」) も上記の理由に加えて、躊躇の一種として一人の話者が口癖のように何回も使う傾向が見られたためここでは除外した。

[ra] > [n] (この現象は [n] の前の音節における [r] と後続の母音に変化する — 最初母音が脱落し、続いて [r] が後続の [n] に同化して撥音になる。)

以下の2例のみ見られた。

- ・わかんない [wakannai] (<わからない [wakaranai])
- ・気になんない [kininannai] (<気にならない [kininaranai]) (男)

その他

上記以外の撥音化としては以下のケースがあった。

- ・いろんな [ironna] (<いろいろな [iroirona])

4. 1. 2 音節の脱落に伴う促音化

今回以下の3例だけ見られた。

- ・こっち [kotʃi] (<こちら [kotʃira])
- ・そっち [sotʃi] (<そちら [sotʃira])
- ・来っとき [kitettoki] (<来ているとき [kiteirutoki]) (男)

4. 1. 3 「動詞+て」形の後の [i] の脱落

[i] の脱落は男女とも頻繁に生じた。

例：

- ・心がけてます (<心がけています)
- ・尊敬してる人 (<尊敬している人)
- ・学んでるんですけど (<学んでいるんですけど)
- ・イメージを持って (<持っていて)

4. 1. 4 音節の脱落

[de] の脱落

「～です」の「で」が脱落するケースである。尚、「で」が脱落するだけでなく、

その後促音化したケース（*参照）も多少あったが、それらは「促音化」の項目に入れずに、「[de] の脱落」に分類した。その方が、現在の東京語における音韻変化の特徴がより明らかになると考えたからである。この現象は男性の発話にのみ見られた。

例：

- ・セリフじゃないすか（<じゃないですか）
- ・北海道に行きたいすね（<行きたいですね）
- ・なんて言うんすかね（<言うんですかね）
- ・*そーっすね（<そーですね）

「やっぱり（し）」>「やっば」

「ところ」>「とこ」 *男性の発話にのみ見られた。

4. 1. 5 その他の音節転化

「てしまう [teʃimaw] > 「ちゃう [tʃaw] 例：言っちゃいます。

「では[dewa]」>「じゃ[dʒa]」 例：じゃ、格闘技ですね。

「いや」>「や」 例：やだな。

「ければ [kereba]」>「きゃ [kja]」 *男性の発話にのみ1件見られた。 例：
引っ張っていかなきゃ

「すみません [sumimaseN] > 「すいません suimaseN」 *男性の発話にのみ1件見られた。

「このあいだ [konoaida]」>「こないだ [konaida]」 *男性の発話にのみ1件見られた。

4. 2 男女の比較

上にあげた音の脱落を伴う音韻変化のある形の使用回数と変化を伴わない形を力

ウントし、パーセンテージを表した表を以下に示す。ただし、音脱落のある形態、または、ない「元の」形態の出現回数が5回に至っていない項目に関しては、あえてパーセンテージを出す必要性がないと考え、出していない。（音脱落ある形の使用回数／音脱落のある形の使用回数＋音脱落のない形の使用回数）

表1 音の脱落：男女比較

種 類		性 別	男 性	女 性
1. 撥音化	no > n		24／33 (72.7%)	12／42 (28.6%)
	ra > n		4／9 (44.4%)	1／8 (12.5%)
	いろいろな>いろんな		4／4	4／4
2. 促音化	そちら>そっち		3／4	3／3
	こちら>こっち			
	来ている時>来てっ時			
3. [i] の脱落			35／50 (70.0%)	46／79 (58.2%)
4. 音節の脱落	[de]の脱落		25／278 (9.0%)	0／193 (0%)
	やっぱり>やっぱ		20／37 (54.1%)	6／16 (37.5%)
	ところ>ところ		6／13 (46.2%)	0／16 (0%)
5. その他の音節転化	てしまう>ちゃう		1／3	2／3
	では>じゃ		1／1	1／1
	いや>や		1／1	1／1
	ければ>きゃ		1／1	-----
	すみません>すいません		1／1	-----
	このあいだ>こないだ		1／1	-----
総 数			127／436 (29.1%)	76／366 (20.8%)

一見して分かるように、促音化と「いろんな」「ちゃう」を除くすべての脱落を伴う音韻変化は、男性の発話に多く生じ、男性の方がその使用の種類も多かった。まず、撥音化の [no] > [n] の変化に関して、その使用は男性23回（総数32回に対して）（71.9%）、女性12回（総数42回に対して）（28.6%）で、男性は女性の2.5倍の使用率だった。同様に、[ra] > [n] の変化も、男性が9回中4回（44.4%）、女性8回中1回（12.5%）が使用し、3.5倍男性の方が多かった。男女を通じて「いろいろな」という音の脱落を伴わない形を使用する人がなく、全員が「いろんな」

という形を使用したことから、男女共に「いろんな」は話しことばとしてかなり定着しているものと考えられる。

[i] の脱落は現代東京方言の特徴（パン）と言われているが、今回の調査でも男女の発話の中で頻繁に見られた — 男性50回中35回（70.0%）、女性79回中46回（58.2%）。しかし、ここでも男性の使用率の方が約11%多かった。

次に、音節の脱落についてであるが、[de] の脱落は、女性には1回の使用例もなかったが、男性には、278回中25回（9%）にこの使用が見られた。従って、[de] の脱落は極めて男性的な特徴と言えるだろう。同様に、「ところ」>「とこ」の変化も女性には見られず、男性には、13回中6回（46.2%）見られた。また、「やっぱ」は、男女ともしばしば使用したが、同じく、男性の方が約17%使用率が高かった。

4. 3 “仮説” の検証

さて、ここで、冒頭にあげた“仮説”を検証する。

仮説：インタビュー談話というフォーマルな状況下において、音韻上、男性は女性よりも「くだけた形」とみなされる「音の脱落を伴う形」を使い、女性は男性より「より正しい」とされる「元の形」を使う傾向にある。

4. 2 男女の比較で述べたように、脱落を伴うほぼすべての音韻変化は、女性より男性の発話に多く生じ、男性の方がその「音の脱落を伴う形」の種類も多かった。音の脱落を伴った形の」使用率は、男性29.0%、女性20.8%であり、男性は女性の1.4倍多く脱落した形を使用している。（図1参照）したがって、男性は女性よりも「くだけた形」とみなされる「脱落を伴う形」を使い、女性は男性より「より正しい」とされる「元の形」を使う傾向にある、という仮説が正しいことが証明されたわけである。

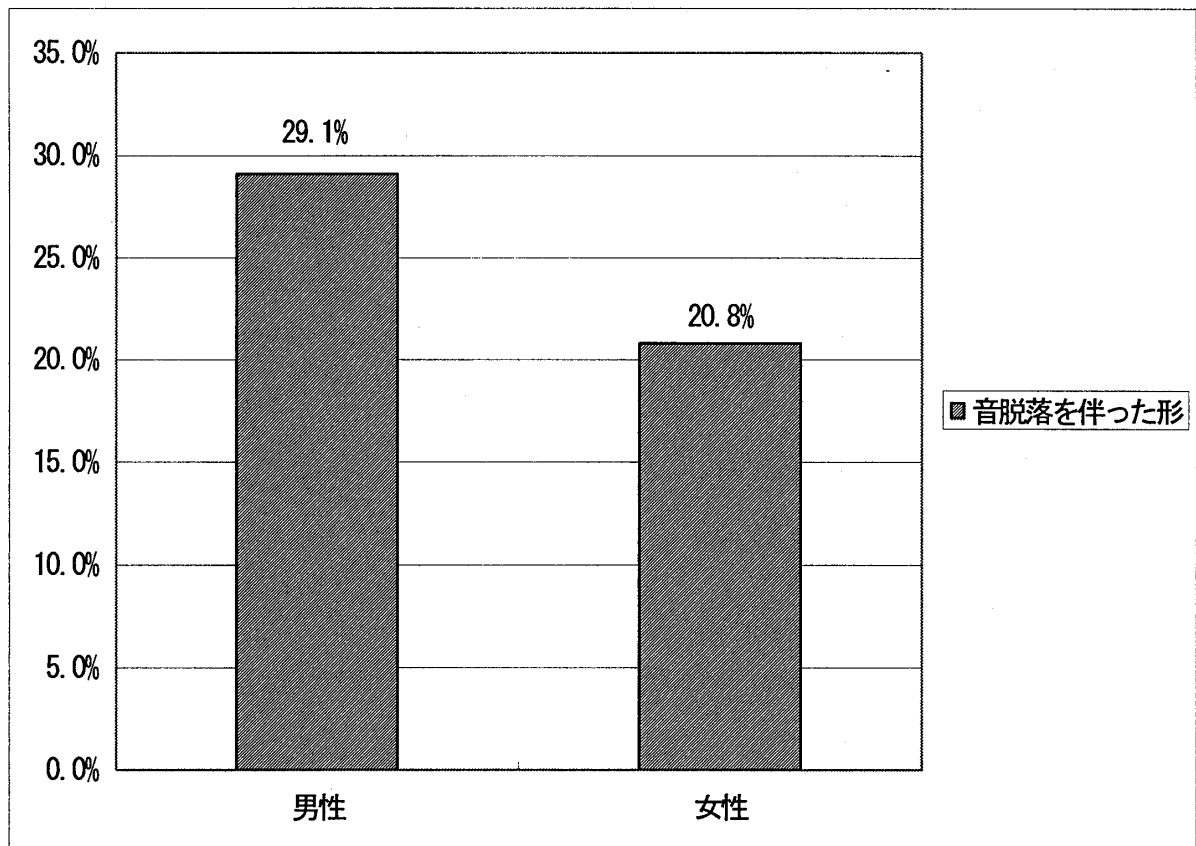


図1 男女間における音脱落を伴った形の使用率

4. 4 男性の発話に特有の音韻的特徴

今回の調査では、女性の発話には見られず、男性の発話にのみ見られた男性特有の音韻的特徴があった。（しかし、その逆はなかった。）

まず、一番顕著な変化は、「～です」の「で」が脱落し、「～す」となる、または、促音化し、「っす」となる現象である。男性20名中12名の発話に見られ、278回の「です」形の内、25回脱落した形が使われた。9%の使用率である。しかしながら、女性では193回の「です」形の内、1回もこの形は見られなかった。したがって、「で」の脱落は極めて男性的な音韻的特徴と言えるだろう。以下の例は、すべて別の男性の発話からのものである。

- ・ほんと最近なん__すけど、興味持ち始めたのは。

- ・ ころも偏ってあるじゃない__すか。
- ・ 敬語とかそういうのに関しては、特に言われたことない__す。
- ・ そーっすね。

尾崎（2000；2002）は、20代から50代の職場における男性の話しことばと女性の話しことばを調査し、「で」の脱落は、そのほとんどが「男性」に見られる、それも20代を中心とする「若年層」に見られると報告している。そして、特に疑問形「すか」については、20代の男性の使用率は1割に近いと述べている。本研究では、「すか」だけの出現率を個別に出していないが、「すか」の形を含む「で」の脱落は9%であり、尾崎のデータとかなり近い結果となった。

更に、尾崎（2000）は、大学生を中心としたサークル仲間の男女の会話も分析し、「す」は20代を中心とする男性の若年層でよく用いられていることを確認している。しかし、それと同時に、「もっともそれらの人々の間でも、「す」よりは「です」の方が優勢であることもまた事実であり、「若い男性は『す』を使っている」などと一般化しすぎてはいけない。」（p. 54）と付け加えている。この「す」より「です」の使用が一般的であるという点も本研究結果と一致する。

「まじッスカ スカがついてて ていねい語」

これは、第一生命が行なった第15回サラリーマン川柳ベスト100（平成14年2月投票実施）で第9位に、応募作品総数20,612の中から入選したものである。（飯野・恩村・杉田・森吉2003, p. 78）飯野等は、「この川柳には「まじッスカ」と若者が話すのを聞いて、「あれでていねい語のつもりだったんだ……」と新たな発見をした人や戸惑い、あるいは怒りを覚えた人の気持が表れている。」と述べ、それと同時に、これだけ多くの人が投票したという事実、「かなりの共感を得たと言えるだろう。」と述べている。

最近、筆者自身もテレビで若い男性タレントを中心として、この「で」抜きことばをしばしば耳にすることがある。また、実際、テレビのテロップも「まじッスカ？」「魚っす。」などど流れたりすることから、この「で」抜きことばは、若い男性の

ことばとして、特に、インフォーマルな会話においては完全に市民権を得ていると言えよう。

尚、これは筆者個人の印象であるが、今や「で」抜きことばは若い男性のみならず、中高年の男性の間でも結構使われているように感じる。しかし、「～っす」という促音化した形を使うのは圧倒的に若年層に多く、中高年の場合は大抵促音化しない形を使うように思われる。

女性に関しては、この「で」抜きことばは一般的でないかもしれないが、女子大生話を聞いていると、まれにこの使い方を耳にすることがある。また、テレビドラマ「アタックNo.1」(2005年放映)の中で女子高生がクラブの先輩と話すときに、「いいっすよ」など、「で」抜きことばを頻繁に使っていた。したがって、この「で」抜きことばは、やがて若い女性のことばとしても珍しくなくなるのではないだろうか。

次に、「とこ」(<「ところ」)も男性においては、13回中6回(46.2%)、7名がこの表現を用いたが、女性の発話には出現しなかった。女性は16回とも「ところ」と発音した。しかし、筆者の考えでは、今回の調査では女性の発話にこの形は現れなかったが、女性にとっても日常的な表現のように思える。以下に、異なる男性によって使用された例をあげる。

- ・行ってみたいとこですか。
- ・そういうふうなとこに気をつけて。
- ・今んとこは、そう違うって感じたところはないですね。

撥音化[ra] > [n]の現象も女性には8回中1回見られた(「わかんない」)のみである。しかし、男性には9回中4回見られ(「わかんない」「気になんない」)、使用率は44.4%であった。この変化も筆者は、本来女性の発話にもしばしば見られるのではないかと推測する。

促音化のところであげた「来てっ時」(<「来ている時」)という表現は、かなり

男性的な印象を受けるが、1 ケースしか使用例がなかった為、男性に特有の表現と言うにはまだ早い。同じく、男性だけに見られた表現として、「きゃ」(<「ければ」)、「すいません」(<「すみません」)、「こないだ」(<「このあいだ」)があつたが、すべて1 回の使用しかなく、また、女性にはこれらの表現自体出てこなかった。したがって、今の段階ではこれらの音節転化も男性に特有とは言いがたい。

5. 考 察

調査結果を簡単にまとめると以下のようなになる。インタビュー談話というフォーマルな状況下において、脱落を伴うほぼすべての音韻変化は、女性より男性の発話に多く生じ (1.4倍)、男性の方がその「脱落を伴う形」の種類も多いことから、男性は女性よりも「くだけた形」とみなされる「脱落を伴う形」を使い、女性は男性より「より正しい」とされる「元の形」を使う傾向にあることが明らかになった。そこで、ここでは、男女差の生じる要因について考察する。

5. 1 異なった社会的役割の反映

筆者は、男女間に見られた音韻差を社会的役割分担の差が言語に反映されたものとする。一般的に言って (ステレオタイプ化しているとの批判を覚悟の上だが)、日本社会における男女の役割は異なる。男性は社会に出て働き、家庭を持ち「主人」になる。加えて、その社会の様々な場面において支配者集団、つまり権力を持つ立場になるのは圧倒的に男性の方が多い。政治家、官僚、銀行の頭取、大、中小企業の社長、ホテルの支配人、教育機関の長などをみれば一目瞭然だ。したがって、社会における男性の権力がことばと結び付き、「男ことば」の使用を自他共に容認するのである。つまり、ここでは、男性に音韻的に「くだけた形」とされる「脱落のある形」の使用を女性以上に許容する。

一方、女性に期待されている役割の最大のものは、家庭に入って「主婦」となり、家事、育児¹⁾をこなし一家を支えることである。勿論、今や何らかの形で外に出て働

いている女性が多いとは言え、男性ほど権力を持つ立場には立っていないというのが現状だ。したがって、女性には少数の例外を除いて、権力と結びついた話し方ではなく、支配されている側に期待される「丁寧な（正しい）」ことばが要求される。更に女性には子育てという重要な役目が任されている。中村（1995, pp. 216-217）は、このことに関して以下のような指摘をしている。

実際、「女ことば」の規範は、農漁村より都市、それも中流階級においてより強く守られている（劉1986：72）。さらに、「女ことば」は女の子の躰の一部とみなされており、その責任は多く母親に期待されている。[中略] 社会的地位だけでなく「母親の役割」と「(女) ことばの躰」が同一視されており、ことばづかいによっては「母親失格」の烙印も免れない。[中略]「母親としての役割」、さらにはそれが「中流階級」という社会的地位となれば、おのずと「女ことば」を使うことへの圧力は強くなる。

確かに、筆者が育った過程においても、ことば使いに関する注意というのはいつも母親からで、父親から受けた記憶がない。「もっと女の子らしく話さない。」などと言われたのを覚えている。社会における女としての役割が、女性に「女ことば」を要求するのである。つまり、より「正しい形」、ここでは、「音脱落のない形」の使用ということである。トラッドギル（1988, p. 105）は性別による言語変種が生ずることに関して以下のように説明している。

社会は男と女にそれぞれ異なる社会的な役割を課し、それぞれ異なる行動のパターンを期待するという点で、男と女は社会的に異なる。言語の方はこの社会的な事実を反映させているにすぎない。[中略] 女のことばは男のことばよりも（社会的に）「より良い」のである。これは、一般的に言って、女性は社会的にいっそう「正しく」行動することを期待されている、という事実を反映したものである。

さらに、トラッドギル (p. 106) は、男女の社会的役割の違いが大きければ大きいほど、しかもはっきり分かれていなければならないほど、男女のことばの差も大きい傾向にあると述べている。英語においては、すべて女の方が男より「正しい」というだけだが、男女の社会的役割がもっと明確に分かれている社会、例えば、原始的な食料採集をしている社会や遊牧民の共同体などにおいては、男の言語変種と女のそれとがはっきり区別されていると報告している。

社会的役割分担の違いが言語に写し出されていると考えれば、よく言われている「女性は言語規範により敏感である」「男性と女性では言語規範に対する意識が違う」(コーツ, 1990; ウォードハフ, 1994; 田中・田中, 1996) といった説にも説明がつく。女性の役割として、「より丁寧」で「より正しい」行動が要求されれば、「ことば」を使って生きている者にとって、言語規範に敏感になるのは当然のことである。また、男性の側から考えれば、その役割として、上に立つ者という立場で支配的にふるまう行動が要求され、許可されていけば、言語規範に対してはそう気にせず、「気楽に」話しても差し支えないということになるのだろう。

5. 2 顕在的威信 (overt prestige) と潜在的威信 (covert prestige)

上で見たような役割分担の違いから、女性には、望ましさ、「正しさ」、いわゆる「女らしさ」(定義のないことばをあえて使うが) が求められ、ことばにも反映される。女性の使うことばは、女性にとってより「好ましい」とされる「女らしさ」のシンボルなのである。したがって、女性の方がその社会で、より「正しい」とされている標準的な変種を好むという様々な報告があるのも納得できる。トラッドギルは、ある言語共同体において「標準的」地位にある言語変種とその話者集団に与えられている社会的権威や肯定的評価を「顕在的威信」と言い、その共同体の成員であればだれもが公認している規範意識の反映であるとしている。(小池, p. 184) つまり、女性の方が「より良く」あらうとしてその社会で「威信」ある変種を使う傾向が強いということだ。

反対に、男性には、心身両面のタフさ、無骨さ、ちょっとした悪さ、いわゆる「男

らしさ」が求められ、その特徴がことばにも表れる。つまり、男性のことばは、男性にとって「好ましい」とされる「男らしさ」のシンボルなのである。男性により多いと言われる非標準形に近い形（標準から逸脱した形）の言語使用の理由がここにある。こういったある言語共同体において、より地位の低い変種に価値を見出し、望ましいと思うことを、トラッドギルは、「潜在的威信」と言い（元来は Labov (1963) が使い始めたことばであるが）、帰属意識やプライドの表れとした。つまり、男性は「より正しくなく」振る舞おうとして、「威信のない」言語変種を使う傾向にあるということである。

コーツ (1990, p. 88) も以下のように報告している。

女性が、中流階級の人びとと同様に、より標準形に近い形態（すなわち、社会によって公然たる威信を与えられている形態）を用いる割合が多いのに対し、男性は、労働者階級の人びとと同様に、より非標準形に近い形態を用いる割合が多いことが証明されている。

しかしながら、これらとは逆の現象、女性が「潜在的威信」に価値を認めることもあるということを付け加えておかなければならない。トラッドギル自身も述べているが、若い女性が非標準的変種を好んで使うこともある。（中村, 2001）この現象は日本社会においても観察されている。4. 4でもふれたが、一部の女性の発話に見られる「～（っ）す」（「～です」の「で」の脱落）の使用、また、主に語彙的なものが多いとは思いますが、コギャルことばなどが「潜在的威信」の例である。更に、マスメディアからの情報によると、今東京の女子高生の間で様々な地方の方言を使うことが、「カワイイ」などの理由ではやっていると言う。これらはいずれも帰属意識や連帯意識が表面化したものであろう。

最後に、言語変化についてふれておきたい。名古屋居住のティーンエイジャーの発話における音韻的特徴を調べた Haig (1990, p. 14) は、名古屋方言は、標準語に移行する傾向にあるが、女性の方が男性より、よりすみやかに、尚且つ、より全面

的にこの変化を受けていると報告している。そして、名古屋方言の使用は、男らしい話し方の隠された一つの指標であり、方言を使用し理解するということは男らしくあることなのであると述べている。

トラッドギルも言語変化に関して、地位の高い変種、あるいは標準形から外れる場合には男性がまず音頭を取り、女性が後をついて行くのが普通であるが、規範の方に向かうときには女性に変化を引き起こすことが多いと主張している。

5. 3 音韻変化と日本社会

社会的役割の違いがことばに表れ、そのことばの使い方が慣習化されてしまうルールとなる。それは、そのことばを使う人たちに無言の圧力となり、そのルールに沿った行動を要求する。Lakoff (1975, p. 3) が、“Language uses us as much as we use language” と言っているように、一旦「ことば」が作られてしまうと、その約束事から外れにくくなる。波多野 (1975, p. 29) は、ことばと人間と社会の関係について以下のような説明をしている。

どんな行動でも、それが一旦、「実現」されて外に出ると、それは逆にその行動をおこした人自身にはねかえってきます。いわゆるフィードバックですが、この「疎外 — フィードバック」は、行動の一般特性で、なにも言語にかぎったことではありません。この「疎外 — フィードバック」が社会の中でおこると、「社会的制約」ということになります。つまり、どんな社会でも、「こうしろ」「ああしてはいけない」という規則が生じてきます。

つまり、音韻変化も本を正せば、日本社会における男女の役割分担の違いから生じたものであるが、一旦社会的制約として男女における使用法の違いとして成立してしまうと、今度は行為者にはね返って来て、それを逸脱することはあまり楽ではないということである。これは、波多野の言うように何にでもあてはまる。例えば、一旦成立してしまった憲法を変えるのは容易なことではないのは勿論、学校の校則

でさえ変えることはそう易しくない。

しかしながら、忘れてはいけないことは、あくまでも人間がことばを操っているのであって、ことばが人間を操っているのではないということである。日本人、あるいは日本人が営む社会の変化によって、男女のことばは、音韻現象は、これから先変化する可能性があるに違いない。音韻変化と日本社会、両者は、密接にフィードバックし合う関係なのである。

6. 終わりに

最後に、ここで断っておかなければならないことは、この研究は、東京および東京近郊出身の大学生40名（男女それぞれ20名）という限られた人々を対象者として行った調査をもとにしており、この結果をそのまま日本語における男女差の特徴として決めつけるものではないということである。しかし、今回の結果は、少なくとも、東京語における音韻に関する男女のスピーチスタイルの相違点を示唆していると思われる。今後の課題としては、異なる年齢層、例えば、高校生、中高年の発話行動も調査し、比較することが必要であると考えます。さらに、今回の研究では、音韻変化として音の脱落に的をしばったが、他の音韻現象を観察することも、より包括的な男女間における音韻現象を記述するためには重要であろう。

謝 辞

最後に、この研究に協力して下さった二松学舎大学の学生の皆さん、大学スタッフでインタビューを担当して下さった坪井貴子さん、三島周二さんに感謝の意を表明したいと思います。

注

- 1) 総務省の01年の社会生活基本調査によると、「妻がフルタイムで働き夫婦で子供を育てている家庭で、家事や育児にかかる時間は夫が1日平均36分なのに対し、妻はその6.4倍、3時間50分にのぼる。」「夫は仕事、妻は家事」という男女分業の構造はなかなか変わらない。[中略]「「役割分業」の傾向は小学校の時からすでにあり、中学校の時点で8分、高校では12分、女性の方が家事時間が長かった。自ら進んでやっている場合のほか、「女の子だから」と親が課している場合もあるようだ。」（「男性1日の仕事時間は減ったけど：「家事・育児」たった36分」（2002.10.7）。朝日新聞朝刊 p. 2。

参考文献

- Coates, J. (1986). *Women, men and language : A sociolinguistic account of sex differences in language*. London : Longman Group UK Limited. (吉田正治訳 (1990). *女と男とことば : 女性語の社会言語学的研究法* 研究社)
- 尾崎嘉光 (2000). 話し言葉の用例探し 日本語学19(6)、44-55.
- 尾崎嘉光 (2002). 新しい丁寧語「(っ)す」現代日本語研究会(編) 男性のことば・職場編 ひつじ書房 pp. 89-98.
- Haig, J. H. (1990). A phonological difference in male-female speech among teenagers in Nagaya. In S. Ide & N. H. McGloin (Eds.), *Aspects of Japanese woman's language*. pp. 5-22. Tokyo : Kuroshio Publishers.
- 波多野完治 (1975). ことばと人間 波多野完治・野林正路(編) 新・日本語講座10ことばと文化・社会 汐文社 pp. 1-23.
- 飯野公一・恩村由香子・杉田洋・森吉直子 (2003). *新世代の言語学 — 社会・文化・人をつなぐもの —* くろしお出版.
- 小池生夫(編集主幹) (2003). *応用言語学辞典* 研究社
- Labov, W. (1963). The social motivation of a sound change. *Word*, 19, 273-309.
- Labov, W. (1973). *Sociolinguistic patterns*. Philadelphia : University of Pennsylvania Press.
- Lafford, B. A. (1982). *Dynamic synchrony in the Spanish of Cartagena, Colombia: The influences of linguistic, stylistic and social factors on the retention, aspiration and deletion of syllable and word final /s/*. Doctoral dissertation, Cornell University. Michigan : University Microfilms International.
- Lakoff, R. (1975). *Language and women's place*. New York : Harper & Row.
- 中村桃子 (1995). *ことばフェミニズム* 勁草書房
- 中村桃子 (2001). *ことばとジェンダー* 勁草書房
- 野木園子 (1995). 日本語音韻の男女差 — 母音、音節の脱落と縮約 — (ケーススタディ) アジア文化研究, 2, 国際アジア文化学会 153-165.
- パン, F. C. (編) (1981). *日本語の男女差東西手話学会*
- Romaine, S. (1978). Postvocalic /r/ in Scottish English: sound change in progress ? In P. Trudgill (Ed.), *Sociolinguistic patterns in British English*. pp. 145-157. London : Edward Arnold.
- 劉徳有 (1986). 日本語の面白さ — 日本人が語る<日語趣談> サイマル出版社
- Shibamoto, J. S. (1985). *Japanese women's language*. Orland, San Diego, New York, London, Toronto, Montreal, Sydney, Tokyo : Academic Press Inc.
- Shibamoto, J. S. (1987). The womanly woman : Manipulation of stereotypical and non stereotypical features of Japanese female speech. In S. Philip, S. Steele & C. Tanz. (Eds.), *Language: Gender & sex in comparative perspective*. pp. 26-49. Cambridge : Cambridge University Press.
- 田中春美(編) (1988). *現代言語学辞典〔再版〕* 成美堂
- 田中春美・田中祥子(編) (1996). *社会言語学への招待 : 社会・文化・コミュニケーション* ミネルヴァ書房
- Trudgill, P. (1974). *Sociolinguistics : An introduction*. England : Penguin Books Ltd, Harmondsworth, Middlesex. (土田滋訳 (1988). *言語と社会* 岩波新書)
- Wardhaugh, R. (1992). *An introduction to sociolinguistics*, 2nd ed. Toronto : Basil Blackwell Ltd. (田部滋・本名信行訳 (1994). *社会言語学入門 (下)* リーベル出版)
- Wolfman, W. A. (1969). *A sociolinguistics description of Detroit Negro speech*. Washington D. C. : Center for Applied Linguistics.